トエ2V-27
654
特256
559

思想問題參考資料

昭和十三年八月

張鼓峰事件が畫いたソ聯邦內の波紋

日本文化協會
ロシヤ問題研究會

始

特256
559

張鼓峰事件が畫いたソ聯邦內の波紋

服部麥生

はしがき

張鼓峰頂上に於いて大寫しの顔々相接するが如き對峙の情態で日ソ両軍間に停戰協定が成立してから一ヶ月以上を過ぎた。

張鼓峰事件は從來のソ滿國境紛爭事件とは全く異なる重大な意義をもつてゐた。蓋し日本は極東南方に勢力の大半を注ぎ、支那事變の一大轉換期をなす武漢三鎭攻略戰の進展過程にあり、歐洲はチェコスロバキヤ問題を中心として第三次世界戰爭の噴火口上を彷徨してゐると云ふ逼迫せる條件下に張鼓峰事件が勃發したのである。

張鼓峰事件の意義、日本の立場、ソ聯邦の動向等に就いては新聞にあるひは雜誌にあらゆる視角から論ぜられ、餘す所なき觀がある。然しソ聯邦自體に於いてこの事件が如何に取扱はれ。これを中心として對内宣傳煽動が如何に行はれたかに就いては論ずる所がなかつた様である。

張鼓峰事件のみならず、あらゆる問題に就いて言へることであるが、事件が畫いたソ聯邦内の波紋は種々な形で種々な線を通してソ聯外の諸國にその波動を及ぼしてゐるのである。この意味に於いても張鼓峰事件がソ聯邦内に如何なる波紋を畫いたかは吾人の關心事の一となり得ると推考する。

以下ソ聯紙によつてそれをこゝに紹介することにする、とは云へソ聯邦は周知の如く共產黨の一黨政治下で嚴重なる言論統制の而様で紙

せられてゐると云ふことを念頭に入れて置いて頂きたいと思ふ

初めは處女の如く、

日本に於ける張鼓峰事件の第一報は七月十五日の夕刊であつた。十七日には西駐ソ代理大使のソ聯邦外務人民委員代理ストモニヤコフに對する厳重抗議が大々的に發表され、張鼓峰事件の報道は白熱化して來た。その論調は周知の如く、激越を極め直ちに大戰爭を思はしめた。日支戰爭に加ふるに日ソ大戰爭と言ふ國家存亡の大事件は言ひ知れぬ力をもつて國民の異常なる關心を南方から北方に百八十度の廻轉をなさしめた。十八、十九日と張鼓峰事件に對する報道の調子は依然として激烈であつた。二十日に致ると「小磯大將」の談として「ソ聯戰意なし」が發表され、事件の取扱方はその調子を全

く變へてしまつた。外國電報の主として「日ソ戰擴大せず」なる和平的ニュースを掲載し、外電により、日本の和平的意企を表示さるの觀があつた。

二十日の朝刊には重光大使のリトヴィノフ外務人民委員訪問、抗議提出の報道があり、「和戰兩樣の構え」なる日本の態度が明確に示めされた。七月の月末に到つて日ソ兩軍の戰鬪がしきりと報道され、越たて八月二日には「ソ聯重爆機我を爆擊す」と戰鬪報道があり、論調は頂上に達し、一轉して八月四日には重光大使のリトヴィノフ外務人民委員訪問。双方の戰鬪行爲停止の申込が發表された。これから以後は、幾多の迂余曲折を經ながら進められた停戰協定締結に向ふ努力が報道されたことは周知の通りである。

然るにソ聯邦側の對內報道の推移を見ると日本とは全く逆の行き

をなしてゐる。

ソ聯邦各紙に張鼓峰事件が發表されたのは日本より後ること一週間の二十二日で、二十日の重光リトヴイノフ會議がタス通信として「根據なき日本の要求」なる題の下に發表された。

當時ソ聯邦はロシヤ社會主義共和國同盟の第一回最高會議の議事進行中で、新聞は毎日の樣に代議員の演説を滿載してゐた、二十四日は體育大會でソ聯各紙は、十六萬の全聯邦の各地より送られて來た青年の大デモストレーションに關する報道で一杯であつた。

體育デー示威行進の出物は「タンク攻撃」「オートバイ攻撃」「防毒面行進」その他アクロバート式の出物で「青年よ破兵隊に入れ」のスローガンを素晴しく大きな模擬大砲の上に飜らせたものなど軍國の一色で塗り潰されたものであつた。

その軍國意識の中心は「これこそ（青年）力だ。歡喜にありては偉大にして、美しく、怒にありては峻嚴にして不壊である。この力を試みんとするものには禍あれ」と云ふ調子であつた。

八月一日までに至るソ聯各紙の張鼓峰に關する報道は頗る低調で、その間日ソ兩軍の戰鬪に關する報道が紙面の隅に二三載つたのみであつた。然るに八月一日の國際反戰デーを機として俄然ソ聯邦の報道陣は色めき立つた。八月二日には反戰デーの經過を一齊に報道してゐたがその主要目標はファシスト諸國に對する攻擊、スペイン、支那、チエコに對する同情、聲援であつた。

所が赤軍の攻擊が愈々急を告げ、それと同時に三日からは張鼓峰事件がソ聯紙の第一面一杯に現れた。

「ソヴェート領土に對する日本軍の侵入報道は全ソ聯邦人民を憤激

せしむ」の組織下に各地、各工場、企業、コルホーズに於ける從業員大會の演說、決議が掲載され、以後ソヴェート政府の對日動向に應ずる、ソ聯邦人民の動きが十一日の停戰協定の締結までソ聯邦紙の中心問題となつてゐた。そしてそれ以後は十日から擧行されたソ聯邦最高會議第二回會議の議事がこれに代つてソ聯邦各紙を賑はす樣になつた。

日本の對內報道陣は初めは猛虎の如くいきり立つたが三四日して和議商樣の冷靜なる態度をもつて臨むに至つたが、上述の如くソ聯邦の報道陣は初めは處女の如く、停戰交渉が開始されるや脫兎と云ふかソ聯邦人民を煽動すること實に猛烈を極めた。

かゝるソ聯邦報道陣の行き方は明かにソヴェート政府の動向を如實に反映してゐると云ひ得る。赤軍が張鼓峰に進出の過程にあつては一言半句のニュースもなく。然も反戰デーの大衆的高揚の波に乘つて自己

政府の意企を宣傳し、政府の政策に對する全人民の支持聲援を大々的に公表することは對内のみならず對外ヂェスチョアとして頗る効果的であることは見逃せない。

張鼓峰事件を中心とするソ聯邦内の宣傳戰

前述の如く七月二十二日張鼓峰事變がソ聯紙上に登上するとその翌日「イズベスチヤ」紙にはソ聯邦評論家[illegible]・イリインの「プロヴァケーションの暴露」なる日本に對する短評が發表された。

「日本軍が滿洲を占領した時から關東軍をもつて斷えずソ滿國境に於いて挑戰的事件を尖銳化して來たことは世界周知の通りである、だが最近この國境紛争事件の數が著しく減少して來たことは事實である。勿論これは日本の軍閥が温和に且つ平和的になつたからでは

ない。日本の軍閥は支那の問題で手が一杯になつてゐるからである。支那占領の計畫は全く豫算がはずれてしまつた。支那へは援軍を後から〳〵と送らねばならぬ。反ソヴェト戰爭と滿洲支配をその存在目的として兵力の蓄積を必要としてゐる關東軍も亦果しなく廣漠たる支那大陸には送り込んだ日本軍援助のために自已の兵力を分割せねばならぬ危險に晒されるに至つた。

かゝる危險から脫れるために關東軍はその手段の如何を問はず、何んとかして朝野の注意を自已に向けんと決したのである。關東軍はこう考えた。卽ちソ滿國境紛爭を激發すれば軍最高司令部には在滿洲軍を決して弱めてはならぬむしろ强化せねばならぬと云ふことが明かとなるであらう。」とかゝる兒戲に類した憶測をもつて張鼓峰事件の原因を說明し。宣傳の手がかりとなしたのである。

二十四日體育デーに於いて共産青年同盟中央委員會書記長、コサリヨフは張鼓峰事件に關して次の如く語る所があつた。

「社會主義國はまだむだ一つである。全資本主義國が我々を取り捲いてゐるのである。

敵は戰爭の手段をもつて我々を威脅してゐる。

我々のすべては先日發表された日本大使と外務人民委員との會談を讀んだ。我がソヴェートと運命を共にしてゐる數千萬のソヴェート青年は日本大使の威嚇に無關心たり得ない。

敵が我々に向つて發砲するや否や、我々はソヴェート政府に對し横暴なる敵を思い知らしぬる――ボリシエヴエキ的に思ひ知らしめる權利を我々青年に與へんことを要求する。

我々青年は横暴なる敵を懲し、敵をして我が祖國、我がソヴェート

權力に對し尊敬と畏怖をもつて對さしめん」或る代表者はソ聯邦が北滿洲ではないと云ふことを忘れたのであらうと大言壯語して、先づ張鼓峰事件に就いて大衆的煽動のトップを切つたのである。

だがこれはその後八月一日の反戰デーに至るまで大いした問題とならなかつた。併して前述の如く八月二日以後張鼓峰事件が中心問題となつたのである。

八月二日恐らく反戰デーの大衆的氣勢を利用して日本政府とソヴェート政府間の外交交渉の展開を有利に導かんために、張鼓峰事件に關する宣傳煽動の指令が共產黨中央委員會から發せられたのであらう。

八月三日のソ聯各紙は八月二日に行はれた各企業、各工場、赤軍各部隊、各コルホーズの從業員大會の決議、演說を一齊に掲載した。

「イツベスチヤ」紙は「ソヴェート領土に對する日本軍の侵入の報

道は全ソ聯邦人民を憤激せしむ」、赤軍機關紙「赤星」は「赤軍はソヴェート國境の不可侵を犯す日本の挑戰者を許さず」と題し、琿春條約附屬地圖を示して、各地の大衆動員の情況を詳報した。

八月二日、三日の「プラウダ」紙は「日本帝國主義」と題して、シベリヤ出兵時代からの日本の大陸政策を煽情的に解説したものを載せ、反日運動の資となした。

八月三日の「イズベスチヤ」紙によりソ聯邦各地に於ける情況を示すと次の如くである。

「金屬工の言葉」と題して、

「モスクワの「鎌とハンマー」工場で夜間交代時に大ミーテングが行はれた。伸鋼職場は明く輝いてゐる。勞動者は急慥らへの演壇をぎつちりと取り捲いてゐる。

勞働者同志モレフが先づ立つた。―この極東の地にセルゲイ・ラゾオのパルチザン部隊が日本武力干渉者を打破つたのである。私はパルザン部隊に屬する名譽と幸福を得たのであつた。イッポリトフスキ停車場附近の戰鬪に於いて我がパルチザン部隊は少數であつたが日本軍部隊を完全に殲滅したのであつた。當時我々には銃砲彈丸は非常に缺乏してゐた。今や勇猛果敢なる赤軍には優秀なる軍事的技術、多數のタンク、大砲、飛行機がある。もし日本のサムライが侵入するならば我がソヴェートの領土ではなく彼等の領土で彼等を打ち破らん・・・」次々に勞働者、技師が演台に上り、氣勢を揚げ、最後に女工が登台し、

「我々ソヴェート婦人は夫や兄弟、子供等に後れを取らぬ、我々は彼等と共にもしファシスト侵異者がソヴェート領土の一寸でも犯す

ならば彼等を粉砕せん」とソヴェート勤勞婦人の意氣を示した。

而して工場從業員の名で次の如き決議が採決された。

「日本の軍閥は、我々が何人たりとも我が神聖なる國境を襲ふ者をこの地表より直ちに抹殺してしまふと云ふことを銘記せよ、日本の將軍達はソヴェートの人民には守護すべきものがあり、守護する手段があることを知るべし」

ミーテングは終つた。そして再び機械は全力をもつて運轉を初めた。工場は靜かになつてゐる。夜の空にはまばゆいばかりの天映が輝いてゐる。それは鎔鐵の溶流である」かゝる調子のミーテングの情況は各地から報道され、三日の新聞丈けでも、ウクライナのキエフ市の機關車工場、レーニングラードのスターリン・タービン製造工場、極東のコンサモールスク市の造船工場等々のミーテングの情況が記載されてゐる。

八月四日の『イズベスチヤ』紙はソ聯邦勤勞者は傲慢なる日本軍閥に決定的打撃を與へんことを要求す』の題の下に各地のミーテングの情況を報道した。

全日の『赤星』紙は『赤軍はレーニンースターリン黨及びソヴェート政府の第一の召集に應じ戰爭の惡煽動者を粉碎するの用意あり』の大見出しの下に一面と二面とに各地方各部隊の兵士大會の情況を載せた。

『出征に準備あり』と題する『赤星』紙記者の報道を照介することにする。

『野營、兵營に於いてハサン湖畔の衝突に關するニュースが傳られて行つた。ハサン湖は我々のものである。張鼓峰の頂上は赤軍將兵の心藏の上にあるのだ、我がソヴェートの土地である。輕蔑すべき

ファシスト、サムライ掠奪者に對する憤激は果しなく高まつて行く。赤軍將兵達はファシストが神聖なる赤軍將兵の血をもつて紅に染めんとしてゐる極東戰線の遠いこの地點を地圖の上で探してゐる。

ソヴェートの愛國者は拳を固め目を怒らせて、

――ファシストは多くを支拂はねばならぬ――と叫んでゐる

「極東人」の言葉は最も親しく最も近い。極東人のある所赤軍あり、敵にソヴェート領土の一歩たりとも許さず。

極東戰線から「ヴ・ツイカ」士官學校に十數名の者が入學した。小隊長モチヤロフはハサン湖附近に配置された部隊から來た者であつた。

張鼓峰事件に關するミーテングが行はれるや第一の發言がモチヤ

ロフに與へられた。

騎兵の軍装をしたモチヤロフは静かに演台に立つた。廣間は青年士官で一杯になつてゐる。

――私はこの土地を知つてゐる。私はこの國境地點を調査し且守備してゐたのである。これは我々の土地である。それは日本人に奪ひ取られない。サムライの試みは無駄である。彼等を粉砕せん――これがすべてだ。彼等は我々と戰ふ度びにその失ふ所は大きい。グロデンコに於ける衝突の時に彼等は四〇〇人を失つたが我々は七〇人しか失はなかつた。その中に同志クラスキン大尉がゐた。今ではハサンコ附近に彼の名をつけた部落がある。呪ふべきサムライの手で斃れた同志のために――

すべては軍帽を取り、起立默禱した。

青年士官チョルトフは起つて、
――サムライ共は自分の耳を見ることが出來ぬ如くこの頂上を見ることが出來ぬ――と叫んだ、」
そして他のミーティグに於ける決議文と大同小異の決議を採つてゐる。
八月五日の「イズベスチヤ」紙の見出しは「ソ聯邦の國境を破らんとするすべてのこゝろみは殲滅的打擊にあわん」で、「赤星」紙はウォロシロフの「赤色陸海軍はソヴェートの國境を炯眼にして毅然として守備し、侵略的敵に對し各瞬間に行動の準備あり」の言葉を紙面の壁頭に記してゐる。
六日「イズベスチヤ」紙の見出しは「ソヴェート人民の怒――戰爭の放火犯に對する峻嚴たる警告」で、この日初めて張鼓峰事件に對する外國の動向が發表された。 先づパリーからの「イズベスチヤ」紙特

電であつた。パリーからの電報と云へばその內容は明日に想像されゐ。

そして「外國出版物から」と題して荒木大將の言動評論を載せた。

荒木大將を指して「眞崎は青年士官の精神であり、荒木は眞崎の舌である」と云ひ、東京發行の「大平洋」誌を引用して、內閣强化に於ける荒木大將の役割を指し、池田藏相の經濟的動員、板垣陸相の軍事的動員、宇垣外相の國外活動の動員に對し、民族のイデオロギー動員とし、大學改造問題に對する荒木文相の役割を擧げた。七月の國史學會議に於ける荒木大將の演說「日本帝國の世界的使命」「永遠の平和」に關する言を引用し、それを荒木大將著「帝國軍人の精神」中の「日本の神聖なる使命」に關する「永遠の平和は空想である。國際的論爭の最近の動向は戰爭を顯示してゐる。」に對照して「戰爭、ただ戰爭にのみ日本帝國主義の眞の使命がある」と斷定し、張鼓峰事件と結び付けてゐる。

八月八日に至るまで各地各工場のミーテングの情況は同様の趣旨の下に行はれ、ソ聯邦各紙の論調も同様であつたが八月九日の「イズベステヤ」紙の見出は「偉大なるソヴェート人民は一致してソ聯邦政府の決定的政策を支持す、」と變つた。第二面には八月六日ハバロフフイ市の勤勞者大會（參加者十萬人）とウラデウオストーク市の大會（六萬人）のスターリンに對するメッセーヂを掲載した。そして十日も同様なものであつたがこの日第二回最高會議が開會され、十一日は停戰協定に關する報道のみで、張鼓峰事件の報道は第二回最高會議の報道に代はれた。十三日には全事件に關する外國電報が第一面に載せられたが主要なる問題は最高會議に於ける議事であつた。それ以後はこの事件に關する外國に於ける反響（勿論ソ聯邦に有利なるもの）が多少取扱たのみである。

宣傳煽動の統制

上述せる所からソ聯邦に於ける對內宣傳煽動が如何に政府の政策の一進一退に應じて行はれてゐるかが明かとなつたと思ふ。ソ聯紙上に現はれた所をもつて直ちにソ聯邦人民がその通りに意識し且つ動いてゐると斷定することは早倘であるが、多かれ少かれ、ソ聯邦人民がソヴェート政府、及び共產黨の手に躍らされてゐることを否定することは出來ない。命令一下ソ聯邦全土に亘つて各工場、各コルホーズ等の生產を單位として人民を動員し、政府の政策を人民に徹底せしむる力は實に組織の力であると云ひ得る。

モスクワ等の都市に於いては命令が下れば二三時間にして工場勞動者勤務員を動員し、示威運動は赤色廣場あるひは問題の大使館を目指し雲霞の如く四方から押し寄せて來るのである。

かくの如く強固な組織をもつて厳重なる言論統制によらねば大衆を動員せねばならぬ所に又ロシヤ民族性の弱點、卽ち報なくしては充分なる發意性を發揮せしめ得ないと云ふ反面もあることを見逃せまい。

張鼓峰事件後日譚

感情の動物と云はれる人間も平常冷靜な時には反省をなす能力をもつてゐる。そして自己の誤謬失敗あるひは弱點を素直に公然と認めることが自己を强化することになり又他人の信頼をかち得る一つの手段になつてゐる。レーニンやスターリン或ひはボリシエヴィキ黨の大衆に對する　力の一つもこゝにあると云はれてゐる。だが一旦闘爭あるひは戰爭となり、喰ふか喰はれるかの境いとなつた時感情が先きになるのは當然である。

ソ聯邦のプロレタリアートの獨裁政治を國礎として、階級的利害關係をそ

の至上命令とする階級國家にあつては特にこの點が強く現はれて來る。

「世界で最も幸福な國」「最も自由な民主主義國」「美しき生みの祖國社會主義國」そして「最も强固な銃後をもてる勞農赤軍」と常々から自畫自讃の宣傳煽動をこととしてゐるソ聯邦であるからには一度び干戈をもつて他國家と相見へるとなれば、勝つた、勝つたの宣傳より他に途がない。

八月十五日ソ聯紙所載「タス」電報は、

「赤軍指令部の計算によれば赤軍の戰死者は六一一名、日本軍の戰死者は六〇〇〇名、戰傷者二五〇〇〇名」と發表し、破壞、捕獲されたタンク、飛行機のことに就いては、飛行機ただの一台が射落され、その飛行士はパラシュートで降下し、多分捕虜になつたであらうと報じたのみである。

八月廿五日の「プラウダ」紙は「プラウダ特電」として黨生活欄に次の

記事を載せて赤軍將兵の勇猛果敢を唄つてゐる。

――、小丘のふもとのカン木の茂りに人々が一團となつてゐる。人々はすつかりと武裝して、腰の手りウ彈は黒く物氣味な光をはなつてゐる。これは第一線から黨の集會に集合した某狙擊聯隊の共産黨員達である。前面と兩側面には歩哨が配置され、黨の集會を守備してゐる。この聯隊は数日間戰鬪の中心にあつた。聯隊は猛烈なる逆襲によつて砲兵及び機銃隊の掩護の下に侵入して來た日本軍を擊退したのである。

聯隊黨ビューロ第一書記大尉イワン・マシリヤイが開會を宣した。平常大聲に馴れた人々もこの時ばかりは囁くが如き聲となつた。敵は二三百メートルの所にゐるのだ。いつでも砲火に見舞はれる危險の下にあるのだ。

聯隊政治部員ギンダレンコが立つて、過ぎし戰鬪の結果と張鼓峰頂上

に對する來るべき決定的攻擊の任務に就いて語つた。

彼は黨員に訴へた。

「黨員は戰鬪に於いて前衞の役割を演ぜねばならぬ。身をもつて兵士を引きつけ、より少なき犧牲で敵を擊破し、ソヴェート領から侵入者を打ち出させばならぬ。」

黨員――ラサレフ大尉は立つて政治部員に云つた。

「僕は負傷してゐる。然し進み指揮し、射擊することが出來る。同志コミサール頂上突擊に參加することを許可して下さい。」

ボンダレンコはこの若きコンミニストを顧みて

「よろしい！」と簡單に云つた。多くの黨員が熱烈な調子で自己の決意をひれきしだ。

コミサールの報告に就いて

「――司令部の命令遂行は聯隊黨組織の名譽である。かの高地の占領、黨員の各人は各自の分隊の兵に黨集會の決定を報告説明すべし。――」の決議が滿場一致可決された。

黨集會は終り、黨員達は闇の中を散つて行つた。

突撃を前にして各分隊では時ならぬ集會が行はれてゐる。丘のふもと、カン木の茂みに掩護されたコンサモール達は同盟員の採用を審議してゐる。小さな紙切に愛國者の入黨申込が書れてある。

青年指揮官コルボフの同盟加入を審議してゐるのだ。

「誰か言ふことはないか」

「我々はコルボフを知つてゐる。彼は優秀なる選抜狙撃兵だ。昨日の戰鬪では勇敢なる愛國者たることを示した。彼を同盟員に採用すべきだ」

と兵士のコンサモールが叫んだ

同志リヤボフが政治指導員をやつてゐる小隊では全員がコンサモールとなつた。三人が入黨を申込んだ。先任大尉フロプキンが入黨申込書を提出して云つた。

「黨員として戰鬪に參加したい。推薦狀を得るにはどうしたらよいか———」

「敵を撃破せよ、推薦者はある」

と政治指導員が言つた。

この夜非黨員の兵士達は黨員にこう云つた。

「祖國のために、死ぬならば黨員となつて死にたい。」と、

數人の兵士達が入黨申込をなした。

夜中、明方近くまで歩哨の射撃交換が聞えた。

拂曉、各部隊は突撃命令を受けた。

「突撃線まで進出し、張鼓峰頂上を占據せよ」

戰鬪が開始された。聯隊縫工兵のメシヤンキンは職場をすてゝ第一線に飛出して來た。仕事の暇に覺えた機銃操作が役立つた。負傷した機銃士の役を受け、コロレフ大尉の指揮の下に三人の敵機銃士を擊破した。

進擊、また進擊、丘の急坂を馳け登りながく叫けんだ

「同志スターリンのために！　スターリン憲法のために！　ソヴェート祖國のために！　共產主義のために！」

聯隊黨ビユーロ責任書記マシリヤクが戰死した小隊長に代つて指揮を採つた。大隊長も負傷した。

マリヤクは大隊の指揮をも採つた。

頂上は目の前にある。

「突込め！　同志スターリンのために！　ウラ！」ヒマシリヤクは叱咤した。

日本軍は支へ得ず丘の向側に轉落した。マシリヤクは頂上に立つた。

そして叫けんだ

「スターリン萬才！

　ウオロシロフ萬才！」

ウラの喚聲は全頂上に鳴り響いた。……

この日この夜スターリンの言葉

「ソヴエ！トの人民は他國の土地を必要としないが然し自己の土地は寸土と云へど何人にも決して渡さぬ」が確固不動の原則であつた。

生産に於ける如くハサン湖畔の激戰に於いても黨員は始終前衛の役割を演じた。」

かゝる華々しき宣傳の中にソヴェートの指導者等は第二回最高會議に於て二七〇億の厖大なる軍事豫算を一舉に可決した、昨年度の軍事豫算一七五億に比較し實に六割の増加である。

「もしこれに數倍する國防支出の増額が要求されても、我々はこれをなして見せる。」とのタフタロフ代議員の最高會議に於ける政府提出の豫算案賛成演説の言を引用して赤軍の強化、赤軍に對する人民の配慮を旺歌宣傳してゐる。

八月廿九日の「プラウダ」紙にはハサン湖の戰鬪に参加した某部隊の赤軍新聞に發表された各種の武勇傳を掲載し、戰鬪に於けるコミサール（政治部員）の役割を旺歌してゐる。かゝる記事に於いて特に目に付くことは「スターリンのために」と云ふことで、如何にスターリン自體が偶像化されてゐるかが知れる。

偶像化されたスターリン！スターリンは六十余才彼なき後のソ聯邦
それはレーニンなき後のソ聯邦に酷似したものか否や。

――九月十日――

381
432

昭和十三年九月廿七日　印刷
昭和十三年九月卅日　發行

非賣品

編輯兼印刷發行人　金山賢照

印刷所　麹町區日比谷公園市政會館
日本文化協會

發行所　麹町區日比谷公園市政會館
日本文化協會
電話銀座一一七四

終

トエ2V-27